

# 「生徒文化のジェンダー分析」の課題と展望

—欧米の研究動向をもとに—

比較教育社会学コース 羽田野 慶子

Aims and Prospects for 'Gender Studies on Student Culture': Based on studies in Western countries

Keiko HATANO

The purpose of this paper is to analyze 'student (or pupil) culture' to analyze from the perspective of gender studies, and to consider the aims and prospects for 'gender studies on student culture'.

Studies on student culture in Japan have shown inadequate concern for gender, while gender studies have not examined student culture as a place where gender is constructed. In this paper, we first review studies on student culture and gender in Western countries from the 1960s to the present, then consider the possibility of 'gender studies on student culture'.

Until the middle of the 1970s, most research dealt only with boy's subcultures. Since around the 1980s, those of girls have been dealt with as well, and starting around the 1990s, attention had once again turned to boys, particularly with regard to the construction of boys' masculinities. Another type of study into adolescent culture, which was initiated by Coleman in 1961, clarified the existence of adolescent status systems. Subsequent researches developed the idea that status systems are gendered, and that physical factors, such as athletics, attractiveness, and visibility, are important.

Given the trends of studies mentioned above, there are two ways in which 'gender studies on student culture' might be approached in the future. One is to analyze adolescent status systems, using mainly quantitative methods. The other is to analyze student subcultures and peer group differentiation, using mainly qualitative methods. The integration of knowledge from these two types of method will enable us to shed light on the process of gender construction through student culture and the reproduction of gender through schooling.

## 目 次

はじめに

### I 「ジェンダー形成の場としての生徒文化」という問題視角

- A. 日本の「ジェンダーと教育」研究における生徒文化への関心
- B. 「生徒文化」の定義をめぐって

### II 1960-70年代における欧米の生徒文化研究：生徒文化の「発見」と男子への対象の偏り

- A. コールマン『青年期の社会』(1961年)
- B. ハーグリーヴス『中等学校における社会関係』(1967年)
- C. ウィリス『ハマータウンの野郎ども』(1977年)
- D. 小括

### III ジェンダーと生徒文化：1980年代から現在までの欧米の生徒文化研究の展開

- A. 女子のサブカルチャー研究：女子への着目
- B. 学校における「男性性」の形成：男子のジェンダーへの着目
- C. ジェンダー化されたステイタス・システムとピア・グループの構成：男女の権力関係への着目
- D. 小括

### IV 生徒文化のジェンダー分析に向けて

はじめに

本論文の目的は、生徒文化をジェンダー研究の視角から位置づけ、教育社会学的な分析の対象とする際に求められる、研究の課題と展望について考察すること

である。

生徒文化は、教育社会学における主要な問題関心の一つであり、1960年頃から現在までさまざまな知見が蓄積されてきた。これまでに行なわれた日本の生徒文化研究のレビューとしては、武内・荻谷・濱名(1982)、白石(1985)があるほか、最近では伊藤(2002)が90年代以降の青年文化の変容に関して考察を加えている。しかし、これらのレビューを読んでもわかる通り、生徒文化が「ジェンダーと教育」研究の対象として位置づけられることは、とりわけ日本においては一部のジェンダー研究者を除き、これまでほとんどなされてこなかった<sup>1)</sup>。本稿では、1960年代以降に発表された欧米の主要な生徒文化研究の蓄積をジェンダー研究の関心に基づいて整理した上で、ジェンダー研究としての生徒文化研究の可能性を考察する。

## 1 「ジェンダー形成の場としての生徒文化」という問題視角

### A. 日本の「ジェンダーと教育」研究における生徒文化への関心

日本の「ジェンダーと教育」研究において、生徒文化はこれまでどのような理論的位置づけを与えられてきたであろうか。「ジェンダーと教育」研究では、80年代半ば頃から、それまで職業・教育達成における性差を産み出す「ブラック・ボックス」として捉えられていた学校内部のプロセスに対する関心が高まったといわれる(中西・堀 1997, 81頁)。以来、学校においてセクシズムが「かくれたカリキュラム」として存在していることが指摘され、学校教育がジェンダーの平等化よりもジェンダーの社会化に寄与しているという知見が蓄積されてきた(木村 1990, 宮崎 1991, 中西 1993, 氏原 1996, 西躰 1998)。ただし、そこでジェンダーの社会化を促すエージェントとして問題化された学校教育の諸要素とは、学校の組織構造や学校間の序列構造、教育内容やカリキュラム、あるいは学校内部における教室場面や教師-生徒関係といったものであり、主として学校教育の制度的側面や学校現場のフォーマルな場面が分析対象とされてきたといえる。このような研究においては、学校組織やカリキュラム、教師、生徒など、学校の諸要素によって構成される総体としての「学校文化」が問題になることはあっても、下位文化としての生徒文化そのものが分析の対象となることは少なかった。

日本の「ジェンダーと教育」研究の中で、生徒文化を

直接の研究対象とした唯一のものは、宮崎(1993)のジェンダー・サブカルチャー研究である。宮崎は、『「ジェンダー」の側面がどのようにサブカルチャーにあらわれ……ジェンダーの再生産にどのように寄与しているのか』を明らかにすることを目的とし、『「ジェンダー」の視点を取り入れてサブカルチャーを捉え直す研究』(159頁)をジェンダー・サブカルチャー研究と呼び、女子校におけるピア・グループごとのインタビュー調査をもとに、女子生徒たちの学校への適応と反抗のヴァリエーションを、彼女たちの性役割観や女性性の受容/抵抗とに結びつけながら描き出している。宮崎が「ジェンダー・サブカルチャー」という言葉によって含意していたことは、言い換えれば、生徒文化をジェンダーという視角から見ることによって、ジェンダー形成の場、あるいはジェンダーの社会化を促すエージェントとして、生徒文化を捉え直そうとする試みであったと言えよう。しかし、宮崎の提示したジェンダー・サブカルチャー研究の枠組みは、その後の「ジェンダーと教育」研究においても、生徒文化研究においても引き継がれることはなく、研究の蓄積はなされてこなかった。

生徒文化という研究領域は、その時代ごとの青年/若者の心性の特徴を問題にしたり、あるいは生徒のサブカルチャーの内容や分化の様態についての叙述という形で研究がなされる場合が多い。そのため、「社会化のエージェントとしての生徒文化」という形で問題が立てられることはあまりない。「ジェンダーと教育」研究においてもそうであったといえる。しかし、子どもの社会化エージェントとしてのピア・グループの影響力は、特に初等・中等教育段階の子どもにおいては家族の影響力と並ぶほどに強いと言われており、高等学校が準義務化している今日にあって、ピア・グループを形成する場としての学校は決して無視できない存在である。とりわけ、学校におけるジェンダー形成を問題化する場合、生徒文化は、女性性/男性性が形成される場として、学校教育のフォーマルな側面に比して、より重要視されるべき領域であると言えよう。つまり生徒文化は、「ジェンダーと教育」研究において、ジェンダーの社会化ないしジェンダー形成の行なわれる場の一つとして、重要な位置付けを与えられなければならないのである<sup>2)</sup>。

### B. 「生徒文化」の定義をめぐって

さて、研究の整理に先立って、「生徒文化」概念について検討を加えておかなければならない。『新教育社

会学辞典』(1986年, 東洋館出版社)によれば, 「生徒文化」とは, 「学校集団内部に形成される生徒集団に特有な行動様式と価値志向の型」とされている。実際の研究や論文の中では, 学校における生徒の意識や行動のさまざまな側面を指して「生徒文化」の語が使用されており, 1) 教師や大人に対抗するカテゴリーとしての普遍的な「生徒」の意識や行動の特徴を指す場合もあれば, 2) 特定の学校における生徒の意識や行動の特徴を指す場合, あるいは3) 学校内部に複数存在する生徒集団のサブカルチャーを指す場合など, 実に多様な用いられ方をしているといえる。

こうした多様な問題関心や目的に基づく生徒文化研究には, 問題関心を異にする二種類のアプローチが存在する。一つは学校文化としての生徒文化を対象にするアプローチであり, もう一つは青年文化ないし若者文化として生徒文化を捉えるアプローチである(白石 1976, 米川 1978)。前者は, 生徒文化を成人社会における文化と異質なものと見なした上で, 青年(ないし「若者」)の生活世界の中の主要な空間としての学校における, 青年独自の価値観や行動様式の特徴を明らかにしようという研究関心に基づく研究である。これは, アメリカで生徒文化研究が始められた当初の問題関心であり, Coleman (1961) を典型として挙げることができる。一方, 後者は, 社会における学校という空間の構造的な特性, すなわち教師という大人が子どもである生徒の管理・統制を行う社会機関であることを重視し, 社会一般の文化とは異なる「学校文化」の有り様を描き出す上で, 学校内部のエージェントの一方である「生徒」に特有の行動様式のパターンを明らかにしようという研究関心に基づくものである。これは, Hargreaves (1967), Lacy (1970) らによるイギリスの中等学校における組織特性と生徒下位文化の対応に関する研究に端を発し, その後, Woods (1979) らによる教師-生徒関係に焦点を当てたストラテジー研究やクラスルーム研究へと展開した一連の流れに対応するものである。以上の生徒文化研究における二つの系統は, いずれも「生徒文化」を扱っているという点では同様であるが, それぞれ異なる研究目的のもとに行なわれていることに留意が必要である。すなわち, 前者が「青年」の価値観・行動様式を明らかにしようとしているのに対し, 後者は「学校」における独自の生活世界を明らかにすることを主眼としている<sup>3)</sup>。

本稿では, 生徒文化をジェンダー形成の場として捉えようとする志向性から, 前者すなわち青年文化としての生徒文化を対象とする研究を中心にリファアーする

ことをあらかじめ断っておく。

## II 1960-70年代における欧米の生徒文化研究：生徒文化の「発見」と男子への対象の偏り

まず最初に, 60年代から70年代にかけて行われた初期の生徒文化研究のうち, とくに代表的な3つの著作をとりあげ, それぞれの研究を概観したのち, ジェンダーと生徒文化の問題に関わって示唆的な知見を整理していく。具体的に取り上げるのは, コールマン『青年期の社会』(1961年), ハーグリーブス『中等学校における社会関係』(1967年), そしてウィリス『ハマータウンの野郎ども』(1977年)の3冊である。

### A. コールマン『青年期の社会』(1961年)

生徒文化研究の嚆矢と目されるのは, Coleman (1961) の *The Adolescent Society* である。彼らの研究グループは1950年代後半, アメリカ中西部にある規模・地域特性の異なる10校のハイスクールを対象に, 主として生徒への質問紙調査に基づいて生徒文化の叙述と分析を行った。ハイスクールという世界を「青年期の社会」と捉え, 一般社会とは異なる青年独自の価値観や行動様式の存在を明らかにしたこの研究は, 「青年期」「青年文化」を社会学の対象として「発見」し, 生徒文化研究の道筋をつける役割を果たしたと言える。

Coleman が青年期の社会における重要な要件として関心を注いだのは, 次の二点に集約することができる。第一に, 青年の世界における独自の地位体系(status systems)の存在, 第二に, 生徒間の集団的権力関係のあり方である。

まず, 青年独自のステイタス・システムとは, 同世代の集団の中での個人の「地位 status」を規定する複数の評価の体系を指している。一般社会においては, 学歴や職業によって個人の社会的地位を測ることができると考えられるが, 青年の社会においては, それとは異なる独自の評価基準が存在する, という点である。Coleman は, 青年のステイタス・システムとして, ①学業, ②運動, ③校内活動, ④人気(popularity)の4つの領域を想定した上で, それぞれの領域の持つ生徒間の評価における重要性を測定した<sup>4)</sup>。その結果, 男子においては花形のスポーツ選手であること(=②), 女子においては校内活動のリーダーであること(=③)が, ステイタスを高める上で最も重要な要素であることが明らかになっている(30頁)。そのほかにも, 例え

ば、男子では車を持っていることや女子からの人気、女子では容姿や服装の趣味の良さ、男子からの人気が生徒間での重要な関心事となっており、成績の優秀さという一般社会で通用する客観的な評価基準が、必ずしも生徒間での高い評価にはつながらないことを問題化している。

そして、このようなステイタス・システムのもとで、生徒たちは複数のクリーク(仲間集団)に分化している。クリークの構成はほとんどの場合男女別となっている。男女別のクリーク間には明確な権力関係があり、どの学校においても「リーダー群(leading crowd)」が存在している。クリーク間の関係のあり方は、それぞれの学校によってヴァリエーションがあるものの、かれらのステイタス・システムにおいて高い評価を得ている者ほどリーダー群のメンバーシップを得ているという傾向は共通している。

こうした彼らの知見の中で、ジェンダーの問題として重要なのは以下の三点であろう。第一に、生徒の地位体系において重要視されているファクターが性別によって異なっていること、第二に、とりわけ運動選手であることや容姿・服装といった、異性に対する身体的魅力に関わるファクターが重要視されていること、そして第三に、そうした指標に秀でた者が生徒間の集団的権力関係において優位に立ち得るということである。

生徒たちが学校生活の大部分をクリークに分化して過ごし、ステイタス・システムを背景とした権力関係のもとで行動し、互いを評価しているとすれば、青年期の男性性／女性性の形成におけるそのような生徒文化の影響力は、学業を中心としたカリキュラムに基づく学校のフォーマルな社会化機能に比べて、非常に大きな比重を占めるものであるといえるだろう。したがって、ステイタス・システムのもとでの生徒集団の分化の様相と、そこで形成される男性性／女性性の多様性と一般性の解明という課題が、ここから導き出される。

Coleman の研究に対しては、「青年文化を一枚岩的に捉えている」、「非学業的な生徒文化を過渡に強調している」といった点について、後の研究者から多くの批判がある(白石 1990)。しかし、「青年期における独自の社会の解明」という、その初発の問題関心から導かれた知見の数々は、とりわけ生徒文化をジェンダーの側面から捉えなおそうとするに当たって多くの示唆を与えてくれるといえよう。

## B. ハーグリーヴス『中等学校における社会関係』(1967年)

1967年に発表された Hargreaves の *Social Relations in a Secondary School* は、生徒文化研究の基本文献として言及されることの多い文献である。彼は、ストリーミング実施下にあるイギリスのセカンダリー・モダン・スクールで行なったエスノグラフィックな調査をもとに、そこでの生徒文化の分化の様相について、上位ストリームほど向学校的な生徒文化が優勢になり、下位ストリームほど非行的な生徒文化が優勢になることを図式的に示した。このようにアカデミック・アチーブメントにおける位置づけによって、生徒文化が向学校／反学校に二極分化するという地位欲求不満説は、その後の日本における生徒文化研究のフレームワークにも大きな影響を与えることとなる。

Hargreaves の研究は、前述の Coleman が生徒文化を青年文化として扱ったのに対し、学校文化としての生徒文化に関心を寄せていたといえる。そのため、ステイタス・システムのような複数の学校に共通して見られる青年独自の文化の中身を解明することよりは、特定の学校における組織特性(この場合はストリーミングの実施)とそのもとでの生徒文化のありようを記述することに重きをおいているものの、どの生徒が生徒の間で高いステイタスにあるか、また学級内のクリークの分化など、Coleman と共通する調査内容も多く見られる<sup>5)</sup>。しかし、そこで明らかになったのはストリームによる生徒集団の分化／分離の強さであり、ストリームごとにステイタスの評価基準が異なっているということであった。例えば、学業成績の高さは下位ストリームではステイタスの高さにはつながらないが、一方で、「けんかの強さ」といった非行的な要素については、上位ストリームでは敬遠されている。このように、Hargreaves の研究では、生徒文化全体に共通して見出されるようなステイタス・システムが存在するのではなく、ストリームをもとに分化したサブカルチャーごとに異なるステイタス・システムが見出されているのが Coleman の知見と異なる点である。

また、もう一つここで留意しなければならないのは、Hargreaves の調査したイギリスの中等学校においては、Coleman の調査したアメリカの高校で見られたような、「運動」という要素のもつ生徒文化への強い影響力は全く観察されていないということである。Hargreaves の研究では、「運動」に関して、上位ストリームの方が下位ストリームよりもラグビーやフットボールのクラブに所属している割合が高いこと(54頁)や、同じ運動チー

ム内でもストリームの異なるメンバーの間には溝があること(78頁)などが指摘されている。しかし、運動面での活躍が生徒のステイタスに影響を及ぼしているかどうかについてはとくに言及されておらず、生徒のインタビューからもそれに類する発言は見出されない。Hargreaves とほぼ同じ時期に、イギリスの中等学校における青年文化についての質問紙調査を実施した Sugarman(1967)は、Coleman の研究にも言及しながら、イギリスの中等学校ではアメリカの高校とは異なり、学校における「運動」への価値付けがそれほど高くなく、学校対抗試合にしても全生徒の関心を集めるほどのイベントにはならないことなどを挙げて、アメリカとイギリスの生徒文化の相違を指摘し、イギリスではアメリカほど自律的な青年文化は存在しない、と結論付けている。

しかし、以上の議論においては、Coleman と Hargreaves, Sugarman との調査対象校における決定的な学校組織上の違いが見落とされている。それは、Coleman の対象校が10校中1校を除いてすべて共学校であったのに対し、Hargreaves らのイギリスでの調査対象校はいずれも男子校であったということである。もし、Coleman の言うように生徒文化におけるステイタス・システムが性別によって異なり、運動をはじめとする身体的要素がステイタスを評価する重要な基準であるとすれば、学校における異性の不在が、そのようなステイタス・システムそのものに大きな変化をもたらすことが想定できる。すなわち、アメリカとイギリスにおける生徒文化の相違点と見なされた「運動」をめぐる価値付けの違いは、共学校と男子校との間の相違点として読み替えられる可能性もあるということである<sup>6)</sup>。

サブカルチャーごとにステイタス・システムが異なるか否かという問題は、Coleman が複数のハイスクールを対象にした量的調査のデータから、そこでの生徒文化の共通性を強調したのに対し、Hargreaves は一つの学校を対象に主として質的データからサブカルチャーの多様性を説明しようとしたという、両者の研究の方法と志向性の違いからもたらされた見かけ上の結論の違いであり、ステイタス・システムは学校、あるいは世代全体に共有される水準の評価基準がある一方で、下位集団の内部においてはそれぞれ異なる評価基準が存在する、と解釈することができるだろう。

以上に見たような Hargreaves の研究は、ジェンダーと生徒文化に関わってどのような知見が得られるだろうか。一つには、ストリームによって分化した向学校的／非行的サブカルチャーにおけるステイタスの評価

基準の違いを、それぞれの理想とする男性性の違いとして読みとることが可能であろう。上位ストリームと下位ストリームにおける「けんかの強さ」をめぐる評価の違いは、男性性のうちに身体的な攻撃性を求めるかどうかの違いと見ることができる<sup>7)</sup>。もう一つは、上述したように、サブカルチャーの二極分化や運動をめぐる評価といった一連の知見を、男子校における生徒文化の特質として解釈することである。彼の研究には女子生徒に関する言及は全くないが、以上のような形で、ジェンダーにかかわる知見を汲み取ることが可能である。

### C. ウィリス『ハマータウンの野郎ども』(1977年)

イギリス労働者階級の男子の反学校文化を階級の再生産プロセスとして描き出した Willis(1977)の *Learning to Labor* は、生徒文化のエスノグラフィとして今もなお色あせない知見の数々を提供してくれる文献である。Willis は、労働者階級が多数を占めるセカンダリー・モダン・スクールの男子校において、反学校的なサブカルチャーを有する12人から成る集団(=野郎ども lads)に視点を定位し、彼らの学校に対するスタンス、労働に対する意味付け、向学校的な生徒に対する批判など、彼ら独特のサブカルチャーの中身を詳細に描いている。その中では、野郎どもの女性に対する見方や関係の持ち方についても言及されている。ここでは、彼が野郎どもの目を通して、野郎どもと同年代の女子生徒をどのように描いているかを確認しよう。

野郎どもが通う男子校の近隣には、ちょうど対をなす形でセカンダリー・モダン・スクールの女子校が存在する。その女子校の生徒の一部は学校外で時折り野郎どもと行動をとるにしており、彼女たちはそうした場面に限って Willis の観察の対象となった。Willis によれば、野郎どもは女子生徒に対して、「性的対象として魅力的であると同時に、家庭的なやすらぎの源でなければならない」という相矛盾した要求を常に突きつけているという。これは、恋愛対象と見なす特定の女子生徒に対してのダブル・バインドな要求として現出すると同時に、女子生徒を単なる性的対象としての「いいなりになる女」と、結婚を意識した恋愛対象としての「女友だち」とに二分するという女性への認識のあり方でもある。こうした女性に対する性の二重規範の適用は、野郎どもの女子生徒に対する「支配」として彼らの行動に具現化している。野郎どもは常に会話の主導権を握り、女子生徒の関心を引きつけようとする。女子生徒はそうした野郎どもの言動にあえて対抗しよ

うとはせず、「クスクス笑いながらそのリードに応じる」(Willis 訳書 1996, p.119)のが常であり、野郎どもによる性的な冗談やからかいにも甘んじて応じている。

このように、Willisの描く範囲における女子生徒たちは、男子生徒に対して常に受け身であり、何の異議も唱えないおとなしい存在にすぎない。しかし、当然のことながら、彼女たちの見せる態度は男性に対する場面に限定されたものであり、彼女たちが自分たちの学校の中で、あるいは学校の外で男子生徒のいない場面においていかなるサブカルチャーを有しているかは全くわからない。彼の問題関心が階級の再生産プロセスにあったことを考えれば、このような男女の描き方における「不均衡」はある意味で当然のものであり、彼自身もそうした「不均衡」を自覚してはいるものの、Willisを含むこれまでの研究者たちが女子を十分に扱わなかったという事実は、この後に述べるように、フェミニスト研究者からの厳しい批判を浴びることとなる。

また、翻ってこうした野郎どもの女子生徒への態度は、彼らの志向する男性性の発現でもあることは言うまでもない。つまり、女子生徒を自分たちよりも劣位に置くことによって自らの優位性を確保し、セクシュアリティにおける主導権を握るという形での男性性の獲得である。ただし、こうして現われる男性性のあり方が、労働者階級に特有のものであるかどうかはさらなる実証データの積み重ねが必要であろう。いずれにせよ、Willisの研究からは、労働者階級の男子のサブカルチャーにみられるジェンダー関係を、限定的ではあっても読みとることが可能なのである<sup>8)</sup>。

#### D. 小括

以上、1960年代から70年代における代表的な生徒文化研究におけるジェンダーに関連する知見を検討した。この時期までの生徒文化研究を概観して言えることは、第一に、Colemanによる「青年期の社会」という視角の提供によって、社会化の場としての「生徒文化」という問題領域が「発見」されたこと、第二に、Colemanを例外として、対象が男子生徒にいちじるしく偏っていたということである。そこで次章では、このような研究蓄積を基盤として展開した、ジェンダーの視点を組み込んだ生徒文化研究について整理していく。

### III ジェンダーと生徒文化：1980年代から現在までの欧米の生徒文化研究の展開

ここでは、80年代以降の欧米における生徒文化研究の中で、ジェンダーに関わりのあるものを中心に、新しく浮上したトピックや問題関心の方向性について、その動向を確認する。ジェンダーの視点を組み込んだ生徒文化研究の流れは、1)女子への着目、2)男子のジェンダー形成への着目、3)男女間の権力関係への着目、の三つの段階にまとめられる。

#### A. 女子のサブカルチャー研究：女子への着目

まず最初に挙げられるのは、対象としての女子の登場である。70年代までの教育社会学においては、女子は研究対象にされないか補足的に扱われるにすぎず、対象に含まれる場合でも心理学・生物学的な説明や解釈が加えられるのみであった(Acker, 1981)。このような状況を転換させるべく、主にフェミニスト女性研究者によって、女子を対象としたさまざまな教育研究が行われはじめる。ジェンダー化された教育制度やカリキュラム、教育アスピレーションや職業アスピレーションにおけるジェンダー差、教室の相互作用場面におけるジェンダー形成など、教育事象のあらゆる場面においてジェンダーの問題が発見されていった。しかし、その中で生徒文化におけるジェンダーに焦点を当てた研究は必ずしも盛んに行なわれたわけではなかった<sup>9)</sup>。

McRobbie(1991)<sup>10)</sup>は、十代の女子のサブカルチャーを扱った先駆的な研究である。彼女は、従来のサブカルチャー研究における女子の不在を指摘し、「サブカルチャーの中に本当に女子は存在しないのか？」と問いかける(12頁)。そして、Willisを始めとするそれまでのサブカルチャー研究が、女子を男子のサブカルチャーの単なる付随物としてしか描いてこなかったことを批判し、自らのエスノグラフィックな研究によって、男子とは異なる女子独自のサブカルチャーの存在を明らかにした。例えば、イギリスのユース・クラブでの参与観察をもとに、13歳から16歳までの労働者階級の女子のサブカルチャーを描いた研究<sup>11)</sup>では、スポーツに興じる男子とは対照的に、女子はどのスポーツにも参加せずに男子の活動を見るという独自の行動が観察されている。彼女たちの主たる興味の対象は男子やセクシュアリティにまつわる事柄であるが、具体的な関心の対象は多くの場合ポップ・スターのような手の届

かない存在であり、実際の恋愛行動を伴っているわけではないという。こうした女子独自のサブカルチャーは「ロマンス・カルチャー」と呼ばれ、従来の研究で描かれてきた男子のサブカルチャーとは異なる女子特有の世界が存在することが明らかになった<sup>12)</sup>。

しかし、女子特有の「ロマンス・カルチャー」が存在するという指摘は、従来までの女子不在のサブカルチャー研究に対しては大きなインパクトとなりえたが、一方で男子と女子のサブカルチャーにおける共通性や、男子のサブカルチャーと女子のサブカルチャーとの相互関係のありようについては十分に考察されなかった。また、McRobbieにおいては、「女子は学校の中にいるが、学校に従事してはいない」(64頁)として、学校における生徒文化については関心を払っていない。女子のサブカルチャー研究と生徒文化研究とは、必ずしもその結びつきが意識されて行なわれたわけではなかったといえる。

#### B. 学校における「男性性」の形成：男子のジェンダーへの着目

1990年代に入り、教育社会学における「女性」の「可視化」がある程度進んでくると、今度はもう一方の「ジェンダー化された性」としての「男性」に関心が向けられ始める。

男性性研究の先駆者の一人である Connell(1989)は、学校が男子生徒に男性性を付与する機関として機能している側面を強調する。男子生徒にとって学校における「成功」と「失敗」は、学校を経て社会的権力を手に入れられる者とそうでない者との分化をもたらす。社会的権力は男性性の源泉であり、したがって、学校における成功によって男性性が獲得される、という見方である。かつて Willis は、学校における「失敗」を労働者階級の「抵抗」と捉え、階級の再生産プロセスを説明したのに対し、Connell は同じ現象におけるジェンダー／セクシュアリティの再生産という側面に焦点を当てたといえる(Charles 2002, 103頁)。

それでは「失敗」した者たちは、男性性を獲得できないのだろうか？Connellによれば、学校で「失敗」した男子生徒は、「スポーツにおける勇敢さ」や「身体的な攻撃性」、「性的征服」といった「別の男性性」の源泉を必要とするという。こうした説明が妥当であるかどうかは検証の余地があるが、つまり、「男性性」には複数のタイプがあるということであり、また、青年期における「男性性」と成人男性にとっての「男性性」とは、内容において隔たりがあるということを示唆している。

このような「男性性の複数性」に関連して、学校におけるエスノグラフィをもとに、ピア・グループごとに異なる男性性を描きだそうとする研究も現われてきている(Mac an Ghail1994など)。こうした研究は、男子の生徒文化をジェンダー形成の場として捉えなおす、新たな生徒文化研究のあり方の一つであるといえよう。

このような「男性性」と学校教育をめぐる新しい研究の潮流は、かつて「女性の問題」としか捉えられていなかったジェンダーの問題を、「男性の問題」へと転換させる試みとして、フェミニズムの観点から評価することができる。しかし、こうした男性性研究の多くは、男女間の権力関係よりも男性内部の差異や集団の葛藤に主な関心が向けられており、そのために男子のみを対象とする場合が多い。確かに「男性性の形成プロセス」の解明のためには、主な研究対象を男子に措定することはごく自然な方法であるのだが、その結果として、研究における「女子の不在」というかつてフェミニストの批判的となった問題が、再び立ち現われてくるというパラドクスについて、どう考えるべきかという難問を抱えていることも事実である。

#### C. ジェンダー化されたステイタス・システムとピア・グループの構成：男女の権力関係への着目

最後に挙げるのは、学校、とくに高等学校におけるステイタス・システムに関する研究の進展である。ステイタス・システムとは、かつて Coleman が『青年期の社会』の中で用いた概念であり、学校内の活動や集団において、いかなる特定の役割や個人の特性が生徒間で高く評価されているかという、個々人の学校内における地位を評価する体系のことを指している。Coleman は、男子のステイタス・システムにおいて、「運動 athletics」の領域で目立った活躍をすることが、男子生徒に高いステイタスをもたらすのに強い影響力を持っていることを明らかにした。このように、ジェンダー化されたステイタス・システムをめぐる研究は、Coleman 以来今日まで、さまざまな方法によって行われている。

Williams & White(1983)は、Coleman と同じ研究枠組みで対象を中学生から大学生までに広げ、男子のステイタスに対して「運動」の持つ影響力の大きさが中学から高校、大学まで一貫していること、一方女子のステイタスに対する「運動」の影響力は男子ほどでなく、「校内活動のリーダー」であることや「成績優秀」であることの影響力の方が上回っていることを明らかにした。さらに、Williams & Andersen(1987)は、BSRI<sup>13)</sup>を用

いて測定した性役割タイプとステイタス・システムとの関係を分析し、性別を問わず「男性的」であると分類される者ほど「運動」を高く評価することを明らかにした。

また、生徒のステイタスを決定付ける大きな要因の一つとして、課外活動に着目する研究も現われてきている。Eder & Kinney(1995)は、課外活動において特定の運動クラブに所属している者のステイタスが強く評価されていることを質問紙調査から明らかにした。それによれば、男子はバスケット・ボールやフット・ボール、女子はチアリーディングやバスケット・ボールの課外活動に所属する者のステイタスが強く評価されているという(309-11頁)。さらにEder(2001)は、アメリカの中学校でのフィールド・ワークを通して、課外活動への所属がピア・グループの構成に関わっており、フット・ボールやチアリーディングのようなステイタスが強く評価されるクラブのメンバーたちが、ステイタスの高いグループを形成していることを指摘している<sup>14)</sup>。ピア・グループは男女別に構成されているが、ステイタスの高いグループの間には異性愛の規範に従ったインタラクションがある。さらにここでは、Willisでは描かれなかった、男子生徒による性的からかいに対する女子生徒の抵抗の契機についても言及されている(134頁)。

以上のように、学校における生徒のステイタス・システムに関する研究の進展は、質問紙調査によるステイタスの評価基準およびその規定要因の測定と、フィールド・ワークによるピア・グループの構成および相互交渉過程の解明という、同じ関心でも異なる方法による研究が蓄積され始めている。先に述べた女子のサブカルチャー研究や男子生徒を対象とする男性性研究との違いは、第一に、男女双方を対象としていること、したがって第二に、男女の権力関係に対する具体的な分析が含まれること、である。また、課外活動、とりわけ「運動 athletics」をめぐる評価が、男女双方のステイタスにかかわっているとの見解は、新たな問題領域の存在を示唆している。すなわち、生徒文化における「運動」という領域の位置づけについて、課外活動を含めて、ジェンダーの観点からの十分な関心を払うことの必要性が示唆されているといえるだろう。

#### D. 小括

以上、80年代以降のジェンダーと生徒文化に関する研究は、それまで周辺化されてきた女子生徒を研究対象に取り込んだのち、次にはジェンダー研究の対象と

しての男子生徒を再発見し、さらに男女双方を対象とするジェンダー間の権力関係へと関心が広がっている。A～Cに挙げた三つの研究の流れは、それぞれ独自の発展を遂げては来たものの、「生徒文化とジェンダー」という視角から捉えれば、段階的に位置付けられるということである。

#### IV 生徒文化のジェンダー分析に向けて

ここまで、1960年代から90年代にかけての生徒文化研究(主として青年文化的アプローチによるもの)を、ジェンダーの問題に引きつけながら概観してきた。これまでに述べたような研究動向をふまえると、いかなる視点と方法による生徒文化のジェンダー分析を構想することができるだろうか。最後にこの点について、筆者の考えを述べることにする。

日本の生徒文化研究においては、ジェンダーの視角からの分析は十分に深められていない(「はじめに」)。一方、「ジェンダーと教育」研究においても、生徒文化をジェンダー形成の場として捉える問題の立て方は、宮崎(1993)を除き、なされてこなかった(Ⅰ章A節)。生徒文化のジェンダー分析とは、生徒文化のジェンダー形成機能を重視した上で、生徒文化におけるジェンダー分離とジェンダー関係を明らかにする研究を意図している<sup>15)</sup>。

生徒文化のジェンダー分析を行う際にとりうるアプローチは、大きく分けて次の二点にまとめられる。一つは、生徒間に共有されている生徒文化のステイタス・システムの解明である。Colemanが主張した「青年特有の地位体系の存在」は、その後の生徒文化研究によって十分に探究されたとは言いがたい。ジェンダー化されたステイタス・システムは、青年にとっての「男性性」「女性性」の評価基準と捉えることも可能である。方法的には、質問紙を用いた統計的分析によって全体的な傾向をつかむとともに、インタビュー等の質的データによって統計的分析を裏付けるという手法が考えられる。

もう一つは、「男性性」「女性性」の形成の舞台としてのピア・グループの分化と構成のメカニズムの解明である。Ⅲ章B節において、男性性研究の興隆の中で行われた男子のピア・グループ研究は、対象としての女子を再び見落とすことになっているという問題を指摘した。この問題に対する対処の仕方は、Ⅲ章C節で紹介したEderのように、男子のピア・グループと女子のピア・グループとの双方の集団間の関係性を視野に入



れて調査・分析を行うことであろう。方法的には、質的方法の採用が想定され、学校での友人関係にかんする包括的なフィールド・ワーク、あるいは特定のピア・グループに焦点化した参与観察、ピア・グループごとのインタビューなどが考えられる。

重要なのは、どちらのアプローチも「ジェンダー形成の舞台としての生徒文化の実態と機能の解明」という目的は共通であり、したがって、質的方法のみ、あるいは量的方法のみに頼るのではなく、異なる方法から得られる知見を統合することによって、研究の目的に到達することが可能になるということである。こうした知見の蓄積を経て、生徒文化を通じたジェンダー形成のメカニズムが明らかになり、それによって、これまでの「ジェンダーと教育」研究と併せて、学校を通じたジェンダーの再生産プロセスの総体を捉えることが可能になるであろう。

また、具体的な研究の際には、対象校が別学か共学かという学校の組織特性に留意する必要がある。なぜなら、異性の存在／不在が、学校内部におけるステイタス・システムやピア・グループの形成に大きな影響をもたらすと考えられるからである。さらに、生徒文化(ないし青年文化)における「運動」というファクターの意味付けについて、青年にとっての「男性性」「女性性」の形成の問題と関連付けながら探究していくことも重要な課題であろう。

いずれにせよ、生徒文化のジェンダー分析は「ジェンダーと教育」研究において、まだ十分に深められていない重要なテーマの一つである。まずは、実証的研究の蓄積と、既存のフェミニズム／ジェンダー理論に照らし合わせた研究の理論的位置づけを進めていくことが当面の課題である。

(指導教官 藤田英典教授)

#### <注>

- 1) 木村(1999)、宮崎(1993)、中西(1998)は、それぞれの関心に基づく「ジェンダーと教育」研究において、生徒文化に関連する知見を導いている。とくに宮崎の研究に関しては、I章A節で詳述する。
- 2) 木村(1997)、西躰(1998)は、学校におけるジェンダー形成に生徒集団が果たす役割の大きさを論じている。
- 3) したがって、どちらのアプローチが生徒文化研究としてより優れているか、といった議論はあまり生産性を持ち得ない。むしろ、どういう研究目的のために生徒文化を対象とする(した)のか、という研究のメタレベルの検討が必要であるといえよう。
- 4) ただし、Colemanは、男子に対しては③校内活動、女子に対しては②運動に対する評価を、それぞれ質問していないことに留

意する必要がある。校内活動とは、おそらくチアリーディングなどの女子を中心に行われる活動が想定されていると考えられ、そうした活動が、男子にとっての運動と対をなす活動とみなされていたことがわかる。そのため、ここでは女子にとっての運動の評価は問題にされていない。

- 5) Hargreavesの場合、質問紙調査において生徒間でリーダー的存在として名前が挙がりやすい者を「ステイタス高」として序列化しているが、ステイタス・システムの存在にまでは言及していないため、どのような要素によってステイタスの高さが評価されているのかについては明らかでない。
- 6) 同様に、ストリームによる向学校／非行の生徒文化の二極分化という現象も、男子校独自のものである可能性がある。地位欲求不満仮説は、女子のサブカルチャーの分化を必ずしも説明しないという指摘もすでになされている(大多和 2000, 209頁)。
- 7) もちろん、後述する Willisのように、こうしたサブカルチャーの分化を階級文化の再生産として捉えることも可能である。
- 8) また、野郎どもとその交際相手である女子生徒たちが、ともに別学校の生徒であることにも留意する必要があるであろう。すなわち、野郎どもと女子生徒たちの典型的な支配と従属の関係は、別学校に特有のジェンダー関係のあり方かもしれないという可能性にも目を向ける必要がある。
- 9) 女子生徒を対象としたエスノグラフィ全般については、宮崎(1999)によるまとめを参照。
- 10) 単行本は1991年の出版だが、所収論文の初出は1974年から1984年である。
- 11) McRobbie(1991, 44-66頁)所収の 'The Culture of Working-Class Girls' 論文。初出は1977年。
- 12) この「ロマンス・カルチャー」は、後に Eisenhart & Holland(1990)によって、大学における女子学生文化にも存在することが指摘されている。
- 13) Bem Sex-Role Inventory の略。性差心理学者である Bem が考案した性役割タイプの分類のための尺度。女性性尺度と男性性尺度の得点の分布によって、「女性的」「男性的」「両性具有」の3つの類型に分類される。
- 14) この研究では、他にも家庭の経済状況、人種・民族などさまざまな要因がステイタスの評価に複雑に関わっていることが指摘されている。
- 15) 研究の意図としては、宮崎の提唱する「ジェンダー・サブカルチャー研究」とほぼ同義であるが、ステイタス・システムなど「サブカルチャー」の範疇に含められない青年文化／生徒文化の総体をも分析対象にするという点を考慮し、あえて「生徒文化のジェンダー分析」の語を用いた。

#### <引用文献>

- Acker, Sandra 1981, 'No Woman's-Land: British Sociology of Education 1960-1979', *The Sociological Review*, Vol. 29, No. 1.
- Blaaxter, Loraine et al. 2001 'Faring Well: Gender and Education 1995-2000', *Gender and Education*, Vol. 12, No. 4.
- Charles, Nickie 2002, *Gender in Modern Britain*, Oxford University Press.
- Coleman, James S. 1961, *The Adolescent Society*, The Free Press.

- Connell, Robert W. 1989, 'Cool Guys, Swots and Wimps: The Interplay of Masculinity and Education' *Oxford Review of Education*, Vol. 15, No. 3.
- Eder, Donna & Kinney, David A. 1995, "The Effect of Middle School Extracurricular Activities on Adolescents' Popularity and Peer Status", *Youth and Society*, Vol. 26, No. 3.
- Eder, Donna 2001, *School Talk: Gender and Adolescent Culture*, Rutgers University Press.
- Eisenhart, Margaret A. & Holland, Dorothy C. 1990, *Educated in Romance*, The University Chicago Press.
- Hargreaves, David A. 1967, *Social Relations in a Secondary School*, Routledge.
- 伊藤茂樹 2002, 「青年文化と学校の90年代」『教育社会学研究』第70集。
- 木村涼子 1990, 「ジェンダーと学校文化」長尾彰夫・池田寛編『学校文化—深層へのパースペクティブ』東信堂。  
——1997, 「教室におけるジェンダーの形成」『教育社会学研究』第61集。  
——1999, 「学校文化とジェンダー」勁草書房。
- Lacy, Colin 1970, *Hightown Grammar*, Manchester University Press.
- Mac an Ghail, Martin 1994, *The Making of Men: Masculinities, Sexualities, and Schooling*, Open University Press.
- McRobbie, Angela 1991, *Feminism and Youth Culture*, Macmillan Press.
- 宮崎あゆみ 1991, 「学校における「性役割の社会化」再考：教師による性別カテゴリー使用を手がかりとして」『教育社会学研究』第48集。  
——1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス：女子校におけるエスノグラフィーをもとに」『教育社会学研究』第52集。  
——1999, 「ジェンダーと教育のエスノグラフィー：欧米の研究動向」『教育学年報7 ジェンダーと教育』世織書房。
- 中西祐子・堀健志 1997, 「「ジェンダーと教育」研究の動向と課題」『教育社会学研究』第61集。
- 中西祐子 1998, 「ジェンダー・トラック」東洋館出版社。
- 日本教育社会学会(編) 1986, 「新教育社会学辞典」東洋館出版社。
- 西躰容子 1998, 「「ジェンダーと学校教育」研究の視角転換」『教育社会学研究』第62集。
- 大多和直樹 2000, 「第十章 生徒文化—学校適応」樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦(編)『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 武内清・苅谷剛彦・濱名陽子 1982, 「学校社会学の動向」『教育社会学研究』第37集。
- 白石義郎 1976, 「「生徒のサブカルチャー」再考」『教育社会学研究』第31集  
——1977, 「イギリスにおける生徒文化に関する研究：セカンダリー・モダンスクールの場合」『九州大学教育学部紀要(教育学部門)』第22・23集。  
——1985, 「学校文化と生徒文化：生徒の社会学」柴野昌山(編)『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社。  
——1990, 「生徒行動の研究：方法と観点」『久留米大学論叢』第39巻第2号。
- Skelton, Christine 1998, 'Feminism and Research into Masculinities and Schooling', *Gender and Education*, Vol. 10, No. 2.
- Sugarman, Barry 1967, 'Involvement in Youth Culture, Academic Achievement and Conformity in School: An Empirical Study of London Schoolboys', *The British Journal of Sociology*, Vol. 18, No. 2.
- 氏原陽子 1996, 「中学校における男女平等とセクシズムの錯綜」『教育社会学研究』第58集。
- Williams, Jean M. & White, Kathaleen A. 1983, 'Adolescent Status Systems for Males and Females at Three Age Levels', *Adolescence*, Vol. 18, No. 70.
- Williams, Jean M. & Andersen, Mark B. 1987, 'Influence of Sex and Gender Roles on High School Status Systems', *Adolescence*, Vol. 22, No. 88.
- Willis, Paul 1977, *Learning to Labor*, Saxton House. 熊沢誠・山田潤訳 1985, 「ハマータウンの野郎ども」筑摩書房(=1996, ちくま学芸文庫)。
- Woods, Peter 1979, *The Divided School*, Routledge and Kegan Paul.
- 米川英樹 1978, 「高校における生徒下位文化の諸類型」『大阪大学人間科学部紀要』第4巻。
- 【付記】本研究は、平成14年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。